

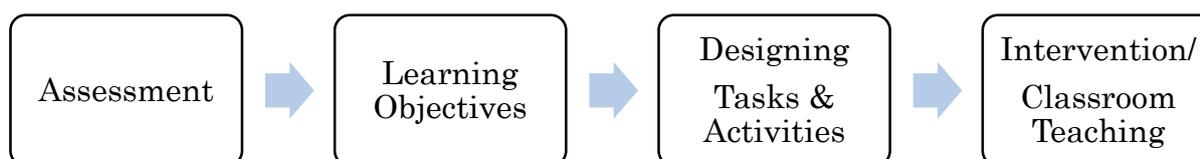
テストと指導の接点：大学入試問題（英語）の診断を通して

吉澤清美

関西大学 外国語学部

我が国における大学入試問題（英語）はその目的が選抜であり、集団基準準拠テストである。集団基準準拠テストでは各受験者（学習者）の能力はその受験者のテストパフォーマンスが、他の受験者のパフォーマンスと比較することによって評価される。個人の結果は正答数や順位などの一つの数値（得点）で表され、同じ試験を受験した集団の中で特定の受験者がどの位置にあるかはわかるが、目標言語を実際に使う際（言語使用）、その得点や順位がどのような意味を持つのかは不明である。

言語指導の際、学習者が言語習得のどの段階にいるのかを見極め、長所、短所を診断し、それに合わせて学習目標を定め、学習タスクやアクティビティを考える。言語



教育において、学習者の言語能力の診断アセスメントは強く望まれているが、言語テストの分野では診断テストに関する研究はあまり進んでいない（Alderson, 2015）。一方、実際の言語教育の場においては、教師がクラスの学習者の言語能力を日々様々な方法を用いて評価しており、得られた情報は学習者の言語能力の診断に活用できる。これらの方法は総合的評価、形成的評価を目的とする定期試験から授業観察、提出物の分析などが含まれる。また、言語の4技能のうちのリーディングを例にとれば、リーディング・アラウド、リーディング・ジャーナル、ポートフォリオ、学習者の自己評価なども診断情報のソースとして活用できる（Hedgcock & Ferris, 2009）。

目的

本発表では、Cognitive Diagnostic Assessment（CDA、認知的診断アセスメント）の考えを応用し、診断テストとして開発されていない英語選抜テストから教育、指導に必要な情報を提供できないかと考え、英語入試長文問題を受験者（英語学習者）の外国語である英語での読む力の診断テストとして活用する可能性を追求する。CDAは、大きく、テストのコンテンツ分析（各項目とその項目を正答するために必要な能力、スキルなどの対応を示した出現マトリックス作成）、データ分析、診断フィードバックの段階を含む（Jang, 2009）。本発表では認知的スキルの定義を質的なアプローチを

用い行った結果に焦点を置く。

方法

出現マトリックス作成は二つの段階を経た。第一に、日本語を母語とする大学4年生の英語学習者3名に研究に参加してもらった。全員英語圏での約1年間の留学経験を持つ。参加者には私立大学Aで実施された英語入試問題の長文問題2問39項目に解答してもらい、その際に、発話プロトコル法を用い、考えていることを発話してもらった。発話プロトコル法に慣れるための練習を行い、その後問題の解答をしてもらった。解答終了後、インタビューを行った。発話プロトコル、インタビューはICレコーダーに録音し、文字おこしを行い、その後、参加者が各項目に正答するためにどのような能力、スキルを必要とするのか、誤答にいたる場合は、原因はどこにあるのかを分析した。このプロセスから、各項目を正答するために必要なスキルを抽出し、それらを定義した。第2の段階では、抽出したスキルとそれらの定義を使い、テスト項目の分析を行った。分析は経験豊富な日本人英語教員2名に依頼した。Table 1は研究に使用した英語長文問題のテキスト分析の結果である。発表ではプロトコル分析並びに項目の分類結果を説明し、他の発表者、フロアーとの議論を行う。

Table 1 Textual Variables of Two Passages

	Teachers' Dilemma		Gandhi	
	Tokens (%)	Types (%)	Tokens (%)	Types (%)
Word counts	1010	367	808	370
Word frequency				
one	894 (88.5)	291 (79.3)	571 (70.7)	231 (62.4)
two	58 (5.7)	47 (12.8)	98 (12.1)	61 (16.5)
three	23 (2.3)	16 (4.4)	55 (6.8)	44 (11.9)
not in the list	35 (3.5)	13 (3.5)	84 (10.4)	34 (9.2)
Readability				
Passive		9%		16%
FRE		77.8		51.7
FKGL		6.3		10.1
RO		Narrative		Expository

Note: FRE = Flesch Reading Ease; FKGL = Flesch-Kincaid Grade Level; RO = Rhetorical organization

謝辞 本研究に関して、関西大学脇田貴文先生に多大なご協力をいただき、深く感謝申し上げます。また、項目分析にご協力いただいた先生方、学生の皆さんに深く感謝申し上げます。